

HEARTful

笑顔と心をつなぐネットワーク

はーとふる

2021年
冬号

■新春オンライン鼎談

明るい社会づくり運動が照らし出す 新しい社会と生き方

秋葉 忠利 × 砂川 敏文 × 澤田 章好

特定非営利活動法人
明るい社会づくり運動 理事長

特定非営利活動法人
明るい社会づくり運動 顧問・前理事長

特定非営利活動法人
明るい社会づくり運動 常務理事

| 連載 |

環境問題を考える

われら明社人「秦野市明るい社会づくりの会」

被災地レポート「めいしやのもり」



コロナは一人ひとりが 明社運動を考えてみる チャンスでは



村上 哲也

NPO法人明るい社会づくり運動ひょうし 理事

明けましておめでとうございます。今年こそ、いいこといっぱい年になりますようお祈り申し上げます。さて一昨年4月27日、「明るい社会づくり運動提唱50周年記念大会」が催され、5月1日から新しい「令和」の時代がスタートしましたが、全国の都道府県明社や地区明社の皆さまにおかれましては、それぞれの50年の思いをかみしめる機会になったのではないかと思います。

私の所属する「NPO法人明るい社会づくり運動ひょうし」は、宗教協力を基盤として発足し、14年目を迎えました。次の50年に向けて、地域で活動しておられる方々と手を携えて、一人ひとりの心の中に明社精神を根づかせていけるよう、提唱者の願いや運動のあり方について今一度学び直してみたいと考えました。

50年が経ち、会員が高齢化した、後継者がいない、活動への参加が少ないなど色々と課題はあると思いますが、何が何でも主体的に取り組まねばということではありません。

私は、兵庫県身体障害者福祉協会が推進している「みんなの声かけ運動」に参加しています。

これは、兵庫県が進めている「ユニバーサル社会づくり」の一つで障害のある人や高齢者など誰もが街中で困っている時に、皆が声をかけて助け合う運動です。

中国武漢で発生した新型コロナウイルスは、世界に蔓延し、日本でも学校の休校、職場はテレワークなど不要不急の外出の自粛。緊急事態宣言が出され、東京オリンピックも延期となり、経済や社会生活にも多大な影響をもたらしております。私たちも手洗いうがいとマスクの着用が普通になり、テレワーク労働の普及により、人とのつながりも変わってきました。そして、世界中で人間の価値観やライフスタイルを大きく変える可能性があるとも言われています。

そんななか、世界中が協力してワクチンの開発を進めるなど協調や連帯が自然とできてきます。連帯や協調が必然的に生まれ、幸福や豊かさが見直されてくるように思われます。「我一人がよかつたら」とか「人を押しつける」という気持ちで薄れてくるかもしれない。コロナ大明神ではないですが、有難いことを受けとめて次の生き方を考えてみるよい機会ではないでしょうか。皆さま、ウィズコロナの中でピンチをチャンスに心を切りかえて、これからの明社運動を今一度、考えてみませんか。

耀メッセージ

Contents

はーとふる2021年 冬号

【目次】

- 1……新春オンライン鼎談 明るい社会づくり運動が照らし出す新しい社会と生き方
 - 8……環境問題を考える——地球の未来を守るのは私たち！
 - 10……われら明社人
 - 13……被災地レポート
 - 14……掲示板
 - 16……誌上賀詞交換
- 耀！連隊 明社レンジャー



澤田 章好

特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動 常務理事



秋葉 忠利

特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動 理事長



砂川 敏文

特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動 顧問・前理事長

新春

オンライン鼎談

明るい社会づくり運動が照らし出す 新しい社会と生き方



司会／菊地正人
(事務局長)

新しい年を迎え、みなさまお健やかにおすごしのことと思います。

昨年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大で、多くの地区明社が活動を休止せざるを得ない状況となりました。そのなかで、私たち一人ひとりが、新しい日常とどう向き合うかを考える機会となりました。今回、新旧理事長と常務理事がリモートで臨んだ^{ていだん}鼎談も初の取り組みです。

これからの明るい社会づくり運動をどう進めていくか——みなさまと共に考えていければと願っています。

明るい社会づくり運動が照らし出す新しい社会と生き方

明るい社会づくり運動に つながる原体験

司会 昨年（令和2年）7月に、前理事長の砂川顧問が任期満了で秋葉理事長にバトンタッチされました。初めに砂川前理事長から退任の挨拶をいただけますでしょうか。

砂川 昨年6月で任期終了となり退任させていただきました。明るい社会づくり運動（以下、明社）の発展のために、いささかでも寄与することができたなら大きな喜びです。特定非営利活動法人明るい社会づくり運動（以下、全国明社）の役員の皆さん、事務局の皆さん方のご協力と、協力団体の多大なご支援のお陰さまで。そして、何よりも全国各地の地区明社の皆さんのご理解と温かいご支援の賜物です。感謝しております。

司会 砂川前理事長さんは、4期8年にわたって全国明社の理事として、また理事長として、明社運動を牽引してくださいました。あらためて感謝を申し上げます。

澤田 先の理事会におきまして、砂川前理事長には、新たに「顧問」というかたちで明社運動に携わって

いただくことになりました。さらなるご支援をいただきたいとお願ひ申し上げます。また、コロナ禍ということで、この鼎談^{ていだん}もリモートで行うことになりました。初めての経験ですが、新しいシステムを活用することができ、次なる時代、新しい社会への幕開けではないかと思っております。

砂川 こちらこそ、今後ともよろしく願ひします。明社運動に加わってからのいろいろな体験をし、多くのことを勉強させていただきました。

さて、少し唐突なのですが、実は私、明社運動の原体験ともいえる光景を折に触れて思い出すのです。今日はそのことから話してみようと思います。

それは、中学時代の同じクラスだった女子のことで。その子は毎日きちんと登校し、授業中も休み時間も自分の席で黙って行儀よく座っていました。横から見ていて、「先生の話を分かっているかな?」「友だちと話さないのかな?」「何を考えているのだろうか?」などと思っております。通学時も道路の端をゆつくりと遠慮がちに一人で歩いていました。「道の真ん中を歩いてもいいんだよ」と私は思うわけですが、その子に聞くことも、言葉をかけることもしませんでした。いまになり、その出会いが、世の中にはいろいろな人がいて、皆、一生懸命に生きているのだと教えてく



れたように思います。思いやりの心を大切にしようと思えるようになったのは、この出会いにつながっているのではと思うのですね。

澤田 感受性の豊かな中学時代に、そのような経験と思い出をお持ちだったのですね。

砂川 私の心に大きな影響を与えているのだと思います。このことが、帯広市長時代の私に、あらゆる人が孤立したり、排除されたりしないような支え合う社会づくり、つまり、インクルーシブを推進させたといってもよいでしょうね。

司会 では、新たに理事長に就かれた秋葉さんからひと言ごあいさつをいただければと思います。

秋葉 理事長に就任させていただき、たいへん光栄なことだと思っております。同時に、責任の重さも感じています。

私も中学時代のことです。印象に残っていることがあります。電車通学をしていましたが、同じ電車に乗って通学している友だちがいましました。ある日、「学校に行きたくない」と思ったことがありました。その日は起

きるのも嫌で、布団の中に潜り込んで、「学校行かない」と言ったのです。すると突然、その友だちが家を訪ねてきたのです。そして、「一緒に学校に行こう」と言ってくれました。毎朝、同じ電車に乗っていたので、その朝、私の姿が見えないことを心配して、途中で降りて私の家に寄ってくれたのかもしれない。その友だちの「ほっとけない」という気持ちがあつたお陰で、学校に行けたと感謝しています。

一昨年の「明るい社会づくり運動提唱50周年記念大会」の宣言文の中に、「あつたかい」「ほっとけない」「ゆずりあい」「ささえあい」「まもりたい」という言葉がありますが、私は「ほっとけない」に「ピン!」ときたのです。この一つの記憶を通して、そうした気持ちをもつことの大切さを感じています。

澤田 なるほど。明社運動にかかわる人は、大なり小なり、年齢にかかわらず、「ほっとけない」という熱い気持ち、共感心ともいえる気持ちをもって、そのような経験をしてこられたのでしょうか。もう中学時代には戻れませんが、お二人のような体験ができなかった人間はどうしたらいいのでしょうか。教えていただけたらと思います(笑)。

砂川 いまからやっても遅くないですよ(笑)。

秋葉 おそらく、皆さんも砂川さんや私のような経験をなさっていると思います。経験にも濃淡がありますから、その中で「ほっとけない」とか「あつたかい」とか、「まもりたい」という気持ちが他の人より強い人もいるわけです。明社運動をなさっている方は、他

の人よりちよっぴり、「ほっとけない」という気持ちを強くもっているのではなから思っています。

砂川 そうだと思えます。それぞれ経験したことが、いまの明社活動につながっているのだと思えます。

個人の役割と明社の役割

司会 昨年は新型コロナウイルスの感染拡大で活動を休止された方がほとんどだと思います。こうした時代における、私たち一人ひとりの役割、明社の役割とはどのようなことなのでしょうか。

砂川 日本の社会状況を端的に示す例の一つに、ここ50年間の国民意識の推移をまとめた「日本人の国民性調査」（統計数理研究所）があります。その中に女性の意識の動向が載っております。例えば、「生まれ変わるしたら男性がいいか、女がいいか？」とありますが、「男性がいい」という答えは40%から20%に減り、「女性がいい」が45%から70%と大幅に増えています。これに関係するもう一つの質問の「今の日本で楽しみが多いのは男性か、女性か？」については、「男性の方が楽しみが多い」が60%から3分の1の20%に減っています。そして、「女性の方が楽しみが多い」と答えたのは、昔は15%でしたが、最近は60%に増えています。どれも大逆転ですね。これは、女性が明るく生活を楽しめる社会になってきたという現れではないかと思うのです。

最近では、社会が暗いとか、悪い方向に向かっている

のではないかと耳にします。悪い方向に進んでいる個別の事柄もあるのは事実ですが、相対的にみると、私たちの社会は少しずつではあっても、紆余曲折（うよよくせつ）しながら良い方向に進んでいると私は思っています。その良い方向に進んでいる要素の一つとして、明社運動の取り組みが力を発揮してきたことに疑いはありません。今後、自信を持って、社会をより良い方向に進める取り組みを推進していくことです。そして、一人でも多くの方に参加していただき、人間性を豊かに開花させていきたいと思います。

秋葉 私は大学生の頃から原水爆禁止世界大会の通訳のアルバイトをしていました。通訳の多くは女性で、彼女たちはみな仕事と家庭を両立していました。そんな彼女たちが異口同音に言っていたのが、「世界平和は、家庭の平和から」でした。

当時、日本は高度成長の時代で、男性は企業戦士として家庭を顧みず、日本の成長に貢献していました。時代背景としては理解できる面もありましたが、社会全体から見ると、かなりの重圧が女性にかかっている時代でした。その中で、「家庭の平和」を保ちながら、「世界の平和」に貢献したいという強い思いで、女性たちは通訳の仕事をしていたのでした。

その後、私は大学で数学の教師をし、衆議院議員としても仕事をしましたが、1999年からは広島市長になりました。

砂川さんも市長経験者ですからお分かりだと思いますが、基礎自治体は、政治の基本です。都市としての

ありようや、自治体の機能に合った政治、社会のあり方が大事で、それは逆に言うと、自治体がしっかりしてこそ地域社会は機能するということで、同時に、「家庭が大事」ということでもあるのです。人間が存在する上でのいちばん身近な関係である家庭が、地域や社会に存在して、基礎の部分をガッチリと固めていくことが大事ではないかと思うのです。

砂川 社会にはいろいろな単位があり、世界全体も、国全体も、町内会や自治体も一つの社会です。そのすべての社会は、一人一人の暮らしを平和のうちに安定させて、安心して日々を送れることを目指しているのだと思います。そして、社会を構成する人びとを幸せにすることを考えてみますと、世界の状況がどうであれ、人びとの日常生活を大切に、身近な生活の場から良くなっていくことが重要です。その身近な場所を良くすることは、逆にそれが世界の状況をも変える大きな力になるかもしれないのです。ですから、秋葉さんがおっしゃったように、「世界の平和は家庭の平和から」また逆に「家庭の平和は世界の平和から」と言えると思うのです。

明社運動の原点に立ち返って

澤田 かつて明社が特定非営利活動法人（NPO法人）になる前の「全国協議会」時代のスローガンに、「足元の世界平和」というものが掲げられていたと記憶しています。いま、砂川さんのお話を伺っていて、あら

ためて、「明るい社会の原点はここにある」と思い出しました。

砂川 明社運動が「世界の状況をどう左右していくか」も大事ですが、手の届く範囲の社会を、平和で安定した暮らしができる場所にしていくことが大事だと思います。ですから、明社運動に取り組む皆さんは、地域社会の現実をしつかり踏まえて、日々の活動をしていくことです。いままでの明社の活動、地区明社の活動は、おそらくそれが底流になっていると思いますし、それが積み重なって次の社会につながっていくのだと思います。

秋葉 「原点」ということで考えると、学ぶことだと思います。それは、地区明社の皆さんや、ボランティアの皆さんが頑張っている姿や言葉から学ぶことが大事だということです。つまり、実践から学ぶことですね。「提唱者生誕一〇〇年記念事業」で作られたパンフレットに実践例が出ていました。そのなかに「ゴミバスターズ」という活動が出ています。それはゴミを拾うときに、「ゴミを捨てちゃいけないよ」とは注意しない。強制もしない。ただ黙ってゴミを拾っていくのです。ある境地に達している実践だと思います。そうした姿、行動から学ぶことがたくさんあり、学び方もいろいろあると思います。

実は、中学時代に全校参加の遠足があり、私たちは「帰りの列車の中にゴミを一つも残さない」という目標を掲げました。私たちのほとんどは「そんなくたらないこと」と考えていました。

しかし、一応、決めたことだからということで、ゴミを皆で持ち帰りました。そうしたら、そのことで学校が表彰されたのです。

実際にやってみた後で、とても大事なことだったのだと、価値が分かるようになりました。その後、ごみ問題に対して意識的に向き合い、自然環境に注目するようにになりました。そんな経験を中学生の頃にできたことは、とても大事だと思っています。

澤田 日本人の特質をよく表した一つに、東日本大震災での人々の姿があげられます。大変な被害に遭われた中で、互いを助け合う姿が多く見られました。

その意味で、明社運動は、日本人の元来持っている特質がもとなって取り組まれている運動だと感じています。

砂川 私は休みのとき、公共の体育館を利用させていただいています。そこには黙々と丁寧に清掃をしているスタッフがおり、いつも、トイレや廊下がピカピカで清潔なので、私たち利用者は気持ちよく使用させていただいています。

ある日、「いつもありがとう。綺麗で清潔になって気持ちがいいですよ」と思い切って声をかけました。すると、小さな声で「はい」と言って、少し表情を緩めました。私は、感謝を伝えると同時に、他者の善意を引き出すことが大事だと考えています。それは、明社の基本的な考え方ではないかと思うのですね。そんな気持ちを皆がもてたらいいなと思います。

澤田 他人の善意を受けとめて感謝をする、自分自

身が豊かな心になれるのですね。そのためには、ちょっとした勇氣も必要ですね。明社運動に取り組む方々が、そうした推進役になれたらと思います。

秋葉 私はアメリカに20年近く住んでいましたが、アメリカ社会と日本社会の価値観で決定的に違う点は、一人ひとりの自立度です。アメリカ人の多くは、自己中心的というのではなく、自分自身の尊さとか、人間としてのあり方の基本をしっかりもっています。

それは、大きな権力に対してもきちんと発信できるといった意味での自立です。自分の命は自分で守らなくてはいけないというところに立ち返ると、自立というものがとても大事になるのです。自立した個人が、相手の自立性を尊重することによってより良い集団をつくっていくことは、先ほども申しあげている「大会宣言文」の中に掲げられている「あったかい」「ほっとけない」「ゆずりあい」「ささえあい」「まもりたい」という心によって実現できるものです。それを具体的に、日常的なレベルで実践するという役割を明社が担っているのではないのでしょうか。

澤田 お話を伺っていて、身近なところをしっかりと調和をとりながら取り組んでいくことが大事だと分かりました。

秋葉 お互いを尊重し合いながら取り組むプロセスそのものが、分断を避けることになります。それだけにリーダーの役割が大事になると思います。明社運動を実践しながら、リーダーが成熟していかなければなりません。

社会活動の輪を広げていくために

司会 今後の明社運動を進めていく上で、何が大切で、何が必要なのでしょう。

砂川 やはり善意の心を生かして社会を明るく良くしていくこと。全ての人が持っている善意の心を生かしていくことですね。

例えば、電車の中で若い人が席を譲ってくれたら、「私はまだ若いからそんなこと出来ないよ」と断ってしまうと、勇気を出して言葉をかけたその若者の善意を萎えさせてしまうかもしれません。そうなると、次につながるはずですね。人の善意は素直に受ける、感謝の気持ちをきちんと伝えることが、自分のためでもあり、人のためでもあり、社会全体にいい影響を及ぼしていくと思っています。

澤田 その意味では、明社の原点とは、やはり「感謝の心をもつ」ということと、「足元から学ぶ」ということですね。人からも実践からも学ぶということが大切だと、秋葉さんと砂川さんから教えていただきました。
秋葉 そして、提唱者の庭野日敬師がおっしゃられた「あきらめずに持続していく」ということ。これはすごく大事だと思います。

澤田 自分一人で存在しているわけではなく、「縁」という関係の中で生かされているのだと思います。明社運動とは、それぞれの「縁」の中でお節介を焼きながら、「ほっとけない」という気持ちで取り組

んでいく。「他人のことも我がこととして捉えていく」ことが必要ですね。

砂川 時代を踏まえながら怯むことなく、積極的に革新をしていくことを、秋葉理事長さんに期待させていただきます。

秋葉 ありがとうございます。頑張ります。

澤田 地区明社を中心とした地域に根差した活動はこれから非常に大切です。一方、日本全国をネットワークしているNPO法人という特長を生かし、そこからプラスアルファの取り組みをしていくことも、今後を考える上で大切だと思っています。

司会 お話を伺って、明社運動の今後が楽しみになりました。50周年を迎えてさらに100年、200年先に向けて、よりよい社会を実現できるよう努力させていただきます。本日はありがとうございました。

Profile

秋葉 忠利 あきば ただし 理事長

1942年東京都生まれ。前広島市長。東京大学卒。マサチューセッツ工科大学(MIT)で博士号取得後、日米の大学で教鞭を取る。1990年から衆議院議員を3期、1999年から広島市長を3期務める。マグサイサイ賞、オットー・ハーン平和メダル等受賞。

砂川 敏文 すながわ としふみ 顧問・前理事長

1948年香川県生まれ。前帯広市長。帯広畜産大学畜産学部卒業。同年、農林省農地局入省。北海道開発局帯広開発建設部長等を歴任し1997年に退官。2014年、明るい社会づくり運動理事長に就任。任期満了で2020年7月に退任、同運動顧問に就任。

澤田 章好 さわだ あきよし 常務理事

1955年東京都生まれ。早稲田大学社会学部卒業。同年、立正佼成会学林入林。渉外部広報課、中央学術研究所学術研究室室長等を歴任し、2017年より立正佼成会理事、責任役員。同年、明るい社会づくり運動理事、2018年7月より常務理事に就任。



ダイジェスト版

<https://youtu.be/pyB4aKFApjo>



フルバージョン版

<https://youtu.be/L3L2sOjYtC0>

この鼎談の様子は、YouTubeで配信を行っています。ぜひ、ご覧ください。